世界の巨匠ウラディーミル・ポルーニン監督が新作映画の制作を開始する。
今作では日本人キャストをオーディションするという。日本人起用は二度目である。
ポルーニン監督のオーディションは独特のルールがある。
オーディション会場が豪華客船。10日間の日程。
オーディションの情報を一切漏らさない、と誓約書を書かされ、オーディション期間はスマホも携行ず事務局が保管。マネージャーは同行不可で俳優本人以外は乗船できない。
船内で4次審査まであり、各オーディションにてAからDまでの判定が出される。
Aが出たら出演決定。Bが出たら次の審査に進出。Cはボーダーで条件によっては進出。
Dはオーディション終了。
Dが出たら小型船で帰還となる。
オーディションに監督は不在。オーディションの度に、事務局から面談にて合否通知とアドバイスがある。
俳優同士は練習以外のコミュニケーションが許されていない。適当なニックネームを割り振られその名前でやり取りをする。
リオとタマキはオーディション期間中ペアを組まされずっと一緒に芝居をし3次審査まで終えた。
二人の相性は抜群。
4次審査の前日にタマキはリハーサルルームを予約し、オーディション事務局を通し、リオに練習相手を打診した。

テーブルとイスだけがあるオーディションルーム。
タマキ、リハーサルルームの窓から海を眺めている
リオ、入室する

リオ　「タマキ!」
タマキ「あ、ごめん呼び出しちゃって」
リオ　「お互いおめでと～(と、拍手をする)」
タマキ「まあまあ座って」

タマキ、リオ、椅子に座る

リオ　「あ、私4次審査で使う台本持ってないよ」
タマキ「なんで?」
リオ　「……A判定でした」
タマキ「(立ちあがって)まじで?」
リオ　「内緒ね」

タマキ「……じゃあ、下船？」
リオ「そ」
タマキ「……（深刻な顔）」
リオ「はいはい深刻な顔しない。ちゃんと練習付き合うから。タマキも絶対次行くよ」
タマキ「いつ？」
リオ「明日の午前中だって」
タマキ「……（さらに深刻な顔）」
リオ「……何？」
タマキ「いや」
リオ「本見せて。セリフ覚えちゃうから」
タマキ「あのさあ」
リオ「うん」
タマキ「俺C判定なのね」
リオ「C？」
タマキ「うん」
リオ「……そうなんだ……何か条件言われた？」
タマキ「……4次審査料二十万払えるなら、だって」
リオ「え？二十万？……あ、そう」
タマキ「……」
リオ「でも受けるんでしょ？」
タマキ「リオさあ」
リオ「うん」
タマキ「……全部信じてる？」
リオ「ん？……何を？」
タマキ「オーディション」
リオ「……」
タマキ「どう？」
リオ「……お金で迷ってるの？」
タマキ「迷ってるとかじゃない」
リオ「試してるんだと思うよ。タマキの本気を」
タマキ「あ～（溜息）」
リオ「監督への忠誠度とか？そういう揺さぶりをするって言うじゃん。ポルーニン監督」
タマキ「ああ、違う違う、そういうことじゃないんだ、聞きたいのは」
リオ「なによ」
タマキ「……都市伝説とかで聞いたことない？映画監督は巨匠になるとオーディションとかいって、人身売買オークションやるって」

リオ　「は？人身売買？」
タマキ　「セレブの性奴隷に」
リオ　「……」
タマキ　「聞いたことあるだろ」
リオ　「……これが、そうだって？」
タマキ　「……の、可能性もあるかなって」
リオ　「……」
タマキ　「……」
リオ　「(溜息ついて)じゃあね」

リオ、パッと振り向きリハーサル室を出る

タマキ　「リオ！」

タマキ、リオをリハーサル室から出さない

リオ　「失礼でしょ？」
タマキ　「何が」
リオ　「みんな真剣に視ててくれてるよ？」
タマキ　「うん、ちょっと聞いて」
リオ　「自分がCだからって何？まだチャンスあるんだからやればいいじゃん。都市伝説なんて負け犬が負け惜しみで作ったでっちあげだよ。くだらない」
タマキ　「違う、俺が言ってるのは」
リオ　「何も言わなくていい。あなた監督の事も事務局のことも作品のことも私のことも、ぜんっぶ侮辱してるんだからね」
タマキ　「聞けよー！」
リオ　「……」
タマキ　「リオ、俺は役者じゃない」
リオ　「は？」
タマキ　「公安から派遣されてきた」
リオ　「公安？」
タマキ　「(頷く)」
リオ　「警察？」
タマキ　「……まあ正確には公安の、警察の依頼を受けた一般人協力者だけど」
リオ　「……どういうこと？」
タマキ　「潜入捜査みたいなもんだよ」

リオ　「……意味不明すぎる」
タマキ「ポルーニン監督の、十年前のオーディションで、何人もモデルとか売れない役者が、行方不明になってるって。そん時も豪華客船で証拠が何も出ないって」
リオ　「……」

リオ、考えながら部屋の奥に歩き椅子に座る

リオ　「……警察から来たって証拠は？」
タマキ「ないよ。そんなもの持ち込めない」
リオ　「……ええ？私のこと嵌めようとしてる？」

タマキ、向かい側に座る

タマキ「助けようとしてる」
リオ　「……ちょっと待ってー、クラクラしてきた。じゃあ全部嘘？まじで？」
タマキ「まだ確証はない。でも二十万払え、だって、変だろ」
リオ　「だって事務局の人とか、ほんとに熱心だよ」
タマキ「演技だろうね」
リオ　「……普通のオーディションだって可能性はないの？」
タマキ「……俺はないと思ってる」
リオ　「……」

タマキ、立ってリオの隣へ行く

タマキ「安全のために、リオは下船しないで、残っててほしい。スマホ取り返せたら応援呼ぶ」
リオ　「……ねえ」
タマキ「うん？」
リオ　「タマキはお芝居好き？」
タマキ「……楽しかった。意外と」
リオ　「4次審査、受けて」
タマキ「……は？」
リオ　「……面談で、向こうの人タマキのことも評価してたんだよ」
タマキ「……」
リオ　「確証がないなら、結論出さないで」
タマキ「……」